



中里介山著

大菩薩峠

大菩薩峠刊行會

昭和二十八年三月二十五日 印刷
昭和二十八年四月一日 発行

(乱丁、落丁はお取替いたします)

大菩薩峠 (第十八巻)

定価三百八十円

送料 三〇円

著作権者 中里 幸作

発行者 中里 幸作

東京都品川区南品川五ノ十三

印刷者 森 高 繁 雄

東京都千代田区神田錦町三丁目十三番地

大菩薩峠刊行会

発行所 株式 彩光社

電話 神田二二三四番
振替 東京一九三九六七番

富士高速印刷株式会社印行

大
菩
薩
峠

第
十
八
卷

目次

京の夢あふ坂の夢の巻……………五

前卷までの梗概……………梁取三義…三八五

題
字

裝
畫

口
繪

道
重
信
教

橫
山
大
觀

著
者

編纂責任

梁 寺
取 島
三 枳
義 史

三十九

京の夢あふ坂の夢の巻

序　　言

今年中に大菩薩峠の第十八冊を出す筈にして置いたのが、亞米利加旅行から引つき、そのあと始末やら、「國民皆農論」の出版やらで多忙を極め、漸く十一月に入つて、一氣にこの「京の夢あふ坂の夢の巻」を書いてしまつた。一千枚近くの原稿を一ヶ月中に書いてしまつて、出版までの整理には自分としても可なり勉強で、人様にも大きに御苦勞をかけた。

自分も漸く、身邊整理の目鼻が明いたので、第十九冊以後は、もつと餘裕綽々として書けると思ふ。

この巻を書き了へた記念の爲に、分量を繰つて見ると、第一冊から此の第十八冊の終りまで、總紙數が無慮九千三百二頁、その字數を概算して見ると、四百七十萬字に及ぶのである。これを古今の大著作の小説と比較して見ると、次のやうな表字になる。

大　　菩　　薩　　峠

四、七〇〇、〇〇〇

八 犬 傳 (馬 琴) 一、七〇〇、〇〇〇

ミゼラブル (ユーゴー) 一、六〇〇、〇〇〇

戦争と平和 (トルストイ) 一、五〇〇、〇〇〇

源 氏 物 語 (紫式部) 八〇〇、〇〇〇

金 色 夜 叉 (紅 葉) 三〇〇、〇〇〇

右の内、外國著作はすべて日本文の全譯によつて大概の見つもりをつけたものである。

即ち、世界のどの長篇大作よりも、その三倍以上に及んでゐるのであつて、而してこれ等の小説は皆完結を告げてゐるのであるが、大菩薩峠に至つては今後まだ／＼どの位つゞくかわからない。

著者は、いくらでも書くことは平氣だが、讀む方の諸君も氣を大きく長く持つていただかなければならない。今や、日本は東亞建設の一つもやらうといふ時代である。氣が短かくてはいけない。

昭和十四年十二月上旬

著 者

一

同じその宵の事、大津おほつの濱から八十石の丸船をよそほひして、こつそりと湖中へ向つて船出をした甲板の上に毛氈けりたんを敷いて酒肴しゅくわんを置き、上座に構へてゐるその人は、有野村の藤原の伊太夫でその傍に寄り添ふやうにして、

「御前様ごぜんさま、光悦屋敷くわつえつやしきとやらの事は、もう一べんよくお考へ遊ばしませ、大谷風呂おほたにぶろの方は、どちらへ轉びましても結構でございますがねえ」

それは女輕業をんなかるわざの親方のお角かくでした。

女輕業の親方お角さんは、今では伊太夫第一のお氣に入りになつてゐる。お角が伊太夫を御前様ごぜんさまと稱となへて見たところで、敢へてへつらうわけではない。伊太夫は伊太夫としての貫祿くわんりくからいつても、その系統からいつても、大名以上の實力はあるのだから、可笑しいことにはならないのだし、お角も亦、この人を御前様以上の御前様として心からの尊敬を以ていふのだから、それも可笑しいことにはならない、伊太夫は軽く領いて、

「それは、どちらでもいい」

と答へました。さうすると、同じ取巻きの町人體なのが引きついで、

「いや、山科やましなの光悦屋敷の方も、ぜひお引取りなさいませ、今の御時世でございませんと、寝ねかして置きましても、持主がちよつと手放す氣にはなれませんが、あれだけの由緒あるお屋敷は、さがし求めた日にはなか／＼出物でものがあるわけのものではございませぬ、萬一賣り主がございまして買ひ切れる主がございせん、買ひたいと申しましても二度と賣り主は出ますまいかと存じまする、お大盡のお耳に入りましたのが、全く以て千載一遇——賣主の爲にも、お買ひ取りの方にもまた古への光悦様の爲にも三方への功德くどくになるかと心得てをりまする」

おたいこを叩いてゐる言葉尻から察すると、この邊に地所の買入れの周旋が相當進んでゐるらしい、併し、今晚は、さういふ事の取引を熟談する爲に、この船をよそほうて湖へ出たのではないらしい。さうかといつて、今晚に限つて、湖上の月を眺めようとの風流の爲の一座でないこともわかつてゐる。地所家屋の事が口に上つたのは、當座の口合だけのもので、この船は別に何か目的あつて沖に向つて進むものらしい。

宿へは、月も見がてら、夜をこめて、竹生島ちくせいじままで行きつき泊りの參詣をして歸るといつて

出たのですが、その竹生島参詣にしながら、何も今晚、この船路を選ばなければならぬ必要も理由もないやうなものです、それを伊太夫の發意によつて、急にこの船よそほひをさせたといふものは、一つは湖中へ向つて、陸上から避難の意味でありました。

避難といへば今の伊太夫の身邊に何か急に迫る危険が豫想されたのか、といふに急にさうあるべき事情もないことは、わかつてゐる、そも／＼伊太夫、今日の旅路といふものが、極めて微行の形式で、關西の名所めぐりといふことになつてゐるが、その實は、やつぱりあの膽吹山の麓に根を張つてゐる。やんちや娘の女王様の動靜が、さすがに親心で氣にかかる、それを見届けんが爲の旅立といふことが、内心の主力を占めてゐるのですから、まだ、當分は膽吹と相望むところのこちらの湖岸を離れる事にはなるまいと思はれる、お角親方にしたところが、このお大盡に付き添うてゐることの限りに於ては、敢て、さう京阪地方に一日を争はなければならぬ兼合かねあひはないものと見なければならぬ。

悠揚として、迫ることの必要のない伊太夫が、今晚避難の意味を兼ねて湖中に出でたといふことは、どうも表面見たゞけでは、その内情を察するに難い、さては、あのがんりきの百とやらの小盗人やっとな奴に覘はれて、つき纏はれる煩はしさからのがれよう爲か、まさか、藤

原の伊太夫ともあるものが、タカの知れたゴマの蠅一足の爲に、陸上に身の置きどころがないといふ解釋もあまりに淺ましい。

實のところ、伊太夫の怖れを成したのは、この前から度々、隱見する湖上湖岸の物騒なる空氣の動搖が然からしめたもので、これが伊太夫の心持ちをも少なからず動搖させてしまひました。湖南湖北を通じて、すさまじい百姓一揆勃發の氣運が今やハチ切れんばかりに胎動たいたうしてゐる、いや胎動ではない、もはや、宿々領々によつては爆發の暴動を上げてしまつてゐる、それが伊太夫の心を常ならず不安にしました。

持てる人としての伊太夫は、他の何事にも驚かぬ事の代りに、持たぬ者共の動靜に神經が過敏となる、伊太夫は然るべき家に生れて、然るべきやうに今日まで來てゐるから、敢て力を以て暴壓と擄取とを、持たぬ者共に加へた覚えはないのだから、モツブの恨みを買ふべき事情は少しも備へてゐない身とはいひながら、持たぬ者共が動搖をはじめた時は、その波動が、何時何處にのようとも、誰人にも増して身にこたへるのは持てる人の身にならなければわからない。

湖岸暴動の風聞を聞くにつけて、伊太夫は忌な氣になつて、それで急に、船よそほひをさ

せて竹生島詣でを口實の水上演難といふ次第でありました。

一一

「おや／＼、何か變なものが流れて來ますねえ」

やゝあつて、お角さんが湖上をながめてかういひました。

「あれ御覽なさい、あれはまだ新らしい盃と盤臺——まあ、こちらの方から、女の帶が流れて來ますよう」

盃と盤臺といつてゐた間は、まだいゝが、女の帶といはれて、一座がゾツとしました。

盃盤の流れたといふことは、聊か風流の響きもあるが、女の帶が流れたといふことに何か一座の身の毛をよだてるやうな暗示が有つたらしい。さうして湖面を見て、そのいふ通りの酒器が浮び來ることは誰もそれを見たが、女の帶が流れてゐるといふことを、舟の上の誰もが、まだ氣がつかない、酒器は水に浮ぶものだが、女の帶は必らずしも水に浮いて流れるとは限らない、帶によつては水に沈み勝ちでなければならぬのを、眼ざとく、その一端を見つけて、帶、しかも女の帶と認定してしまつた。それはお角さんの勘といはなけ

ればならない。

そこで、一座はお角さんの勘を基調として一同に身の毛をよだてたのですが、帯を帯として認め得た者はお角さんの外には一人もありませんでした。

だが、さういはれて見ると、一筋の女の帯が暢揚として丈を延ばして、眼前に腹ばつて、のして行く、さきに流れた、誰にも認められるべき處の酒器臺盤がそれに先行して行く、見やうによると、一匹の大蛇が、その酒器臺盤を追うて、これを吞まんとして吞み得ざるまゝに、追走してのして行く形に見えて、一層物すごくなつたのです。

一座は無言で、ゾツとしたまゝで、その酒器を追ふ平面毒龍の形を見入つたまゝ水を打つたやうに靜寂に返りました。

さうすると、暫らくあつて、その毒龍の尾について、間隔は二三間を隔てゝ、盪觴のやうな形のものが二つ、あとになり、先になり、前なるは振り向いて後ろなるを誘ふが如く、後ろなるが先んじて前なるものに戯るゝが如く、流れ／＼て行くものを認めないわけには行きません。

「あれはボツクリです——女物の、廿歳前の女の子でなければ穿きません」

嚙んで吐き出すやうにお角さんがいふ、それが一層のまた凄味すこみを物いはぬ一座の上に漂よはせたと見えて、ちよつと目を外そらす者さへあつたが、憑つかれたやうに、その行手を見据ゑてゐるものも多かつたのです。

湖上はと見れば、その時、立てこめた一面の霧です。

行手も霧、返るさも霧、たゞその霧が明るなことだけは霧の上に月がある餘德なのであつて、この霧の中を迷はずに進み得るのは船頭そのものゝ手錬しゅれんである、ところがその多年の船頭そのものゝ手腕が怪しくなつたと見えて、

「な、な、なんて、だらしのねえ船扱ひだ、おい／＼何とかしなければ、正面衝突だよ、舟と舟とが、まともにぶつゝかるよ、おい、その舟にや舟夫せんどうがゐねえのか」

こちらの船頭が舟の舳で、あはたゞしくかう叫んだのが、また一座の沈黙の空氣を聳たかめました。

今までは靜かに漂ふものゝ無氣味さに打たれてゐたのですが、今度は、さし當り此方にのしかゝつて来るものがあるらしい。その警戒の爲にとて、こちらの船の舟夫が、あはたゞしいこの警告です。見れば成程、一隻の舟がこちらに向つて、正面衝突の形で前面より突